

エコライフ ~身近な省エネを実践しよう!~

vol.1 ライトダウンからはじめよう!



獨協大学は、省エネやCO₂の削減に向けて、学生が主体となりライトダウンに取り組んでいます。授業期間中の昼休みに教室を見回り、電気を消して節電を呼びかけています。2022年の活動に基づく試算では、1年間ライトダウンを実施すると、およそ17,500kWhの電力消費量が節電でき、電気料も約54万円の節約となります。また、CO₂排出量も8.5t削減されます。これは、約607本の杉の木が1年間に吸収するCO₂量に相当します。

私たちは、この活動を通して、家庭でも無駄な電気を消すという習慣が身につきました。みなさんも、学校や職場、そして家庭でライトダウンに取り組んでみませんか？ (獨協大学国際環境経済学科3年 丹野・日野原)

2021年度から田村市で復興知事業に取り組んでいる獨協大学が、9月号から地球温暖化対策のコラムを担当します。ぜひ、ご活用ください。

獨協大学復興知事業の紹介はコチラ▶



田村市の文化財

岡教育部生涯学習課 81・1215

「昔ばなし」

ずっと昔から人々の間で語られ、伝えられてきた話に伝説や昔ばなし、世間話があります。文字ではなく、口頭で伝わったことから「口承文芸」などと呼ばれます。「桃太郎」や「こぶとりじいさん」などは特に有名です。「囲炉裏端やたばこはさみ、たばこのしの作業中に昔ばなしを聞いた」という高齢の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

昔ばなしには、よく動物が登場します。イヌ、サル、ウマ、ヘビなど。その中で人をだますものとしてタヌキやキツネが出てきますが、大越町牧野と船引町門沢の境、「大木の坂」には多くのキツネがいて、キツネに馬鹿にされたという話がいくつもあり、その中から「大越町史・民俗編」に収録されている「栄太郎さんとキツネ」という話を紹介します。

牧野の岡田に、栄太郎という猟師がいた。ある日、いつものように猟に出たが、ウサギ一匹どころか小鳥も捕れなかった。おまけに日も暮れてきたので、あきらめて家に帰ってきた。家の者たちはいつになくやさしい声で、「疲れたっぺから、早く風呂に入りなっしよ」

と言うので、栄太郎さんはさつそく風呂に飛びこんだ。湯加減もいいあんばいで、つい鼻歌も飛び出した。ある人が用足しから帰る途中、どこからか気持ちよさそうな鼻歌が聞こえてくるので、今時分なにごとだべと思つて、声のする方に近づいてみたら、鉄砲持った男の人が田んぼの中でガラッポ、ガラッポと水こねをしていた。

「何してんだい、こんな夜中に、田ん中で」

「湯に入つていんだわい。いいあんばいだから、あんだも入つていかながい」

と言つていた。よく見たら栄太郎さんのようであった。

「湯なんかではねえぞい。そこは田ん中ぞい」

つて言うので、栄太郎さんは我れに返つて田ん中から上がつてきた。あとでその話になると、栄太郎さんは、「いやあ、あんどきはうまくキツネに馬鹿にされつちまつて」と、頭をかきかき、人に語つていたそう。

9月30日(土)午後1時30分から市歴史民俗資料館で「昔ばなし」(船引民話語り部の会)を開催します。入場は無料ですので、ぜひご来場ください。

今回は「仏像」を紹介する予定です。田村市の文化財一覧はこちら▶▶▶



地域おこし協力隊奮闘記

私は以前、洋菓子製造を行う会社に勤務していた経験があり「スイーツで地域に貢献したい」と考えています。田村市に移住して約2カ月がたちましたが、買い物や日常生活に困ることがありません。自然も豊かで、穏やかな気持ちで生活できています。田村市にはエゴマやサツマイモ、ナツハゼ、パッションフルーツなど、たくさんの特産品があります。



ニパティシエ・岡野が描く あぶくま洞の活性化とは

皆さん、初めまして。岡野正貴です。6月からあぶくま洞に観光振興型地域おこし協力隊として着任しました。

田村市の特産品を使ったスイーツを開発し、スイーツで地域を盛り上げたいです。多くの方があぶくま洞や田村市の魅力を知っていただけるきっかけになればと思います。移住して間もないですが、交流サイト(SNS)を通じて地域のイベントの告知や進捗など発信しますので、皆さんどうかよろしく願います。

私が地域おこし協力隊としてやりたいことは、あぶくま洞で「カフェプロジェクト」を立ち上げることで、まずは、食品衛生管理者など必要な資格を取得し、お菓子製造できる環境や機材の準備を整えます。あぶくま洞の豊かな自然や景色と共に、スイーツやコーヒーをテイクアウト形式で用意し、楽しんでもらいたいです。多くの方があぶくま洞や田村市の魅力を知っていただけるきっかけになればと思います。移住して間もないですが、交流サイト(SNS)を通じて地域のイベントの告知や進捗など発信しますので、皆さんどうかよろしく願います。

▼プロフィール

東京都昭島市出身。特技は写真撮影と料理とお菓子作り。幼い頃から趣味として料理に取り組む、ホテルのパティシエとしてお菓子作りをしていた経験を持つ。スイーツで地域を盛り上げようと奮闘する29歳。

海を越えて 英語指導助手ペンリレ No.122

私は11年前に田村市に住んでいました。その当時は、「花は咲く」という曲をときどき耳にすることがあり、少なくとも一度はアメリカ人英語教師全員でその曲を英語で歌いました。東日本大地震、津波、原子力発電所の事故は、1年過ぎても人々の心から消えることはありませんでした。船引中学校には、原発事故のため避難してきた生徒たちがいました。田村市に住んでいた外国人もその当時は少なかったと思います。日本国内を旅行した時、福島県に住んでいることを伝えると「怖くないの?」「心配ではないの?」とよく聞かれました。私がいつも「いいえ」と答えたのは、いつも安心できて、何も心配していません。他の地域から見ると、その雰囲気は違っていたようです。

4月に田村市に戻って来て、以前と変わっていないことがたくさんあって驚きました。4月には外国人観光客もまた日本を訪ねることができるようになり、マスク



の着用も個人の判断に委ねられるようになりました。これらのことは、田村市が以前と変わっていないと感じる理由なのかもしれません。また、私は11年前と同じ中学校で教えていて、清掃中に流れる音楽も同じなので、前と同じように感じます。

変わったとすぐに気付いた点を挙げると、手を消毒する場所です。私が訪れたほとんどの建物、レストラン、カフェの入り口に手を消毒する場所がありました。それだけではなく、マスク着用をチェックして自動的に消毒液を出す機械をそれまで見たことがなく、日本の安全対策には驚きました。病院では、ほとんどの人がマスクを着用して体温チェックをしています。私が前に教えた中学校や小学校の中には統廃合のためなくなった学校もありますが、それ以外の大きな違いはないようなので、ここ田村市で故郷に戻って来たように温かく迎えていただいていることを感じています。